樫原中だより

学校教育目標 「仲間とともに自らを磨き続けられる人間の育成」

京都市立樫原中学校
学校だより⑦
令和8年（2026）2月18日
校長 川上 貴由

（第２回）学校教育力向上に向けたアンケート結果（生徒回答）

前号で掲載いたしました「学校教育力向上に向けたアンケート」の保護者回答に引き続き、生徒回答の集計結果を紹介いたします。この結果につきましては、学校運営協議会・教職員と共有し、今後の学校改善につなげて参ります。詳細は学校HPに掲載しています。＊数値は「よくあてはまる」「あてはまる」と回答した人数をあわせた割合になっています。

令和7年度「前期」と令和7年度「後期」との比較

＊令和7年度前期より上がった（↑）
＊令和7年度前期より下がった（↓）

設問	前期	後期
①学校生活は全般的に楽しく過ごせている	95%	92%↓
②友達と仲良く過ごせている	97%	96%↓
③困ったときに相談できる友達がいる	92%	90%↓
④学校行事を前向きに取り組めている	91%	94%↑
⑤自らすすんで挨拶ができている	79%	82%↑
⑥学校のルールは守れている	90%	89%↓
⑦授業は楽しい	74%	71%↓
⑧文章の読解力や作文・発表等の表現力が増してきた	69%	75%↑
⑨授業で学んだことは、将来役に立つと思う	84%	88%↑
⑩予習復習をできている	50%	47%↓
⑪グループ学習では仲間と相談しながら、自らの課題を見つけて取り組めている	79%	77%↓
⑫宿題を忘れず提出している	82%	76%↓
⑬授業を受ける前に教室の美化、机椅子はきちんと整理されている	75%	73%↓
⑭自分にはいいところがある	81%	79%↓
⑮将来の夢がある	66%	69%↑
⑯早寝、早起きを心がけている	61%	57%↓

子どもたちの今と未来のため,社会のあらゆる場で「京都はぐくみ憲章」を実践しましょう!

京都はぐくみ憲章

設問	前期	後期
⑰朝ごはんを毎日食べている	88%	87%↓
⑱ハンカチをもってきている	50%	46%↓

♪♪学校生活について♪♪

学校生活に関する項目では、多くの項目で数値が減少しています。本校では、学校適応感尺度（アセス）という指標を使い生徒の実態を考察しているのですが、この指標から分析すると、本校の生徒は学習的適応において課題があることが明白となっています。学習的適応に関するアンケート項目（一部）は以下の通りです。

- 勉強のやり方がわからない。
- 難しい問題でも、どのような答えになるのかねばり強く考える。
- 自分は、勉強はまあまあできると思う。
- 勉強の問題は難しいとすぐあきらめてしまう。
- 授業がよくわからないことが多い。
- 勉強について行けないのではないかと不安になる。

学習的適応は、学校生活とも相関があり、数値が減少している理由は、生徒が学習に対してつまずきを抱えていることが背景にあると推察しています。しかし、設問⑧「文章の読解力や作文・発表等の表現力が増してきた」、設問⑨「授業で学んだことは、将来役に立つと思う」では、数値が改善しており、学習そのものに対する気持ちは持っているのではないかと推察します。

♪♪学習面について♪♪

学校生活と相関して、設問⑦「授業は楽しい」、設問⑩「予習復習をできている」設問⑫「グループ学習では仲間と相談しながら自らの課題を見つけて取り組めている」などの項目で数値の減少が見られます。これらの項目を

改善することが本校の課題だと考えます。

本校では、来年度よりマルチレベルアプローチ（MLA）という包括的生徒指導というプログラムを実施します。MLAでは「個が育つ集団をつくる」ことを強調しており、それは安心・安全であるともに目標志向的な集団です。MLAを実践している学校では「新規不登校者数の減少」「問題行動の減少」「学力向上」に効果が現れています。

このMLAの取組の１つに協同学習というものがあります。協同学習とは「集団の仲間全員が高まることをメンバー全員の目標とする」ことを基礎に置いた実践です。この協同学習を通して改善を図っていきます。

♪♪自尊感情について♪♪

設問⑭「自分にはいいところがある」について2%減少しました。本校の目指す生徒像の１つ“挑戦を支える自己有用感が持てる生徒”にありますように、本校では生徒の自尊感情を育むことに重点をおいています。来年度は、「世界に１つだけの花」のみならず、来年度から実施するMLAにおけるPBIS（ポジティブな行動介入と支援）、SEL（社会性と情動の学習）を通して、生徒の自尊感情を育み学力向上につなげていきたいと思います。

★☆ 社会を明るくする運動 ☆★

第75回“社会を明るくする運動”西京区作文コンテストにて、2名の作品が入賞しました。入賞しました2作品を紹介します。

（２年８組　Ｎ．Ｓさん）

私はこの作文を書くにあたり、「再犯」に注目して考えてみた。私は今まで、一度罪を犯して捕まったのに、なぜもう一度捕まる様なことをするのかと、再犯する意味が全く理解できなかった。だが、ふと考えてみると、犯罪を一度してしまった人の頭の中には、「犯罪を犯して問題を解決する」という１つのルートがある。いつでもそのルートに進めるということだ。反省をしていても、罪を犯す前の普通の生活を送ることができない。その息苦しさやもどかしさから再犯するのではないだろうか。目の前にある苦しさから逃げるために再犯する負のループを断ち切らなければ明るい社会は実現できない。そのためには、周りの人達の支えが必要だろう。

だが、再犯の可能性が０ではない限り、私達は更生者を中途半端な気持ちで受け入れることはできないのが現状だ。

ネットで社会復帰を果たした元受刑者が実際に書いた「再犯防止推進白書」を読んでみた。これには、犯罪・非行を犯した時は優越感などの気持ちに駆られていたが、警察に捕まった後、「自分は本当にこの結果を望んでいたのか」「こんな生き方したくなかったはずなのに」と自問自答していたと書かれていた。このことから私は、更生者も私と同じ人間であり、普通の人生を歩みたいと思っているのだと気付いた。

そして、先程話したように、社会復帰をするには、周りの人達の支えが必要不可欠であり、支える側の私達は「良識のある」私達であるべきだと思った。勝手に考えを膨らませ「あの人は危険だ、近づくな」と遠ざからずに、一度その更生者と接してその人を知ってから、どんな人か判断することが大切だと思った。

明るい社会をつくるには、偏見で人を語らず、理解しようと一歩踏み出せば良いのではないか、私はそう思った。

（２年３組　Ｔ．Ｋさん）

私のおじさんは保護司をしています。おじさんは豪快な人でいつも会うとおもしろい話をしてくれます。普段は地元で建設関係の仕事をしていて、子どもや孫がたくさんいます。

今年の夏休み、会いにいったときに、「保護司って大変なんやろ。昨年、保護司の人が殺されはったっていうニュースがあったし、むずかしい子が多いんやろ。」という話を祖父母たちがしていました。おじさんは、「そりゃ悪いやつよ。でもだれかがやらんといけんじゃろ。」と言っていました。その話を聞くまで私は、「保護司」という言葉を聞いたこともありませんでしたが興味をもったので調べてみました。「保護司」とは犯罪や非行をおかした人が再び罪をおかさないようにその人の立ち直りを地域で支える民間のボランティアのことです。主な仕事としては、月に２回ほど犯罪や非行をおかした人と自宅で面談を行ったり、その人の相談を受けたりします。昨年の５月にはその面談中に保護司が保護していた少年に殺されたという事件がおきていますが、おじさんはそれでも保護司というのは誰かはやらないといけない大切な役割だといいます。私は始めはなぜそんなに大切なのかよく分かっていませんでした。しかし、実際に保護司の人のおかげで自分は社会にもどれたといっている人のニュースをみたり、保護司について調べてみて次の３つの役割があるから重要なのだと考えました。

１つ目は、そういった人たちの相談にのるという役割です。親などには相談できないことも自由に聞ける環境があればまちがった道へまた進んでしまったり悩みをかかえることが少しでも減るかもしれません。

２つ目は、まちがったことをしていたらしっかり注意するということです。親が無関心だったり自分をおそれて注意してくれないことも、あります。そんな中、第三者として注意したり止めてもらえたら、それは少しでも犯罪をくりかえさないストッパーになると思います。

３つ目は、家以外の「居場所」になるという役割です。家にはあんまりいづらい、リラックスできないという人も自分が安心できる場所が１つでもあると心を休めることができるのではないでしょうか。

こういったことは保護司だけができることではなく、悩んでいる友達がいたら私たちでも簡単にできることです。少しでも犯罪にはしってしまう人をへらしたり、くりかえしてしまう人をへらすためにできることは実は簡単なことだと思います。私たちにできることですごしやすい環境をつくり、犯罪やいじめの少ない明るい社会をつくりましょう。